

「ケア労働の素晴らしい値打ちと現状打開の展望は」を読んで

2026年10月4日

佐々木 炎

「ケア労働の素晴らしい値打ちと現状打開の展望は」を読み、前半部分については、大きく共感しました。

著者は、製造業などの労働が「モノに働きかけ、物質的な富をつくりだす」のに対して、ケア労働は「生きた人間に働きかけ、人間の生命・発達・尊厳を保障する労働」と述べています。さらにケアには、人間同士の全人格的なコミュニケーションを通して、ケアされる側だけではなく、ケアする側も成長していくという特徴があると指摘しています。私は、この点にこそケアの本質的な価値があると思っています。

ただし私は、ケアをあえて「労働」という言葉だけで捉えたくないとも考えています。

ハンナ・アーレントは、人間の営みを「労働 (labor)」「仕事 (work)」「活動 (action)」に分けて考えました。この視点から見ると、ケアにはもちろん、人間の生命や生活を支える「労働」としての側面があります。しかし同時に、人と人が出会い、応答し、関係をつくっていくという意味では、「活動」としての側面もあります。そして、その活動を積み重ねながら、施設や制度、地域、専門職集団など、人間がともに生きるための世界を形づくっていくという意味では、「仕事」としての側面もあるでしょう。

つまりケアとは、単に誰かにサービスを提供することではありません。ケアする人とケアされる人との「あいだ」に新しい関係を生み、その関係を通して社会そのものをつくっていく営みです。

そもそも社会とは、上からあらかじめ与えられるものではなく、市井の人同士の日常的な営みのなかから生まれてくるものではないでしょうか。互いに思いやり、心を配り、気遣い、困った時には支え合う——そうした市井の人々の具体的な関係や営みの積み重ねのなかにこそ、私が目指す「ケア社会」「連帯社会」の実体があるのだと考えます。

専門職によるケアは、制度的・意図的に「ケア社会」の基盤をつくる重要な営みです。しかし私は、そのさらに先を見据えたいと思います。ケアすること、ケアされる

ことを通して、私たちが互いに「人間になっていく」。カントの教育論になぞらえるならば、ケアもまた、人間が人間として形成されていく営みであると言えます。キリスト教の「隣人愛」をはじめ、他思想における「仁」「慈愛」「慈悲」といった思いが市井の営みとして広がってこそ、初めて本当の意味での「連帯社会・福祉社会」が形づくられていくのです。

制度を変えるだけで社会は変わるのか

一方で、後半の「現状打開の展望」については、私は少し違う考えを持ちました。

著者は、資本主義のもとでは、数値化しにくいケア労働が低く評価され、労働力再生産のためのコストとして抑制されてきたと分析します。そして、社会主義・共産主義の社会へ進むことによって、ケアや教育、社会保障に振り向けられる社会的財源が豊かになるという展望を示しています。

資本主義社会の中で、ケアが過小評価されてきたという指摘には、私も理解できることがあります。しかし私は、資本主義か社会主義・共産主義か、という二分法だけではケア社会は実現しないと考えています。

社会制度という「パッケージ」を変えることは重要です。しかし、その社会を構成する一人ひとりの「人間観」や「価値観」が変わらなければ、パッケージが変わっても、その中身はそれほど変わらないのではないのでしょうか。私はここに、制度や政策を変える「制度的・構造的アプローチ」とともに、一人ひとりの人間観や価値観そのものに働きかける「人間形成的・教育的アプローチ」が必要だと考えています。

人間を生産性や能力、社会への貢献度によってのみ評価する価値観が残ったままであれば、どのような政治制度を採用したとしても、老いや障害、病気、認知症、貧困などによって脆弱な状況に置かれた人々は、再び社会の周辺へと追いやられる可能性があります。そして専門職自身もまた、そうした人々を単に「保護される対象」「援助される対象」としてだけ捉えてしまうなら、ケアする側とされる側という固定した関係を超えることはできません。

だから私は、二者択一ではないもう一つの方向、すなわち、連帯と社会的包摂（ソーシャル・インクルージョン）を軸とした社会を求めたいと思います。

賃金を上げればケアの問題は解決するのか

もちろん、ケア職の給与を上げることに賛成です。著者が指摘するように、ケア労働者が担っている社会的役割や専門性に比べ、その処遇が十分ではないという現実があります。また、低賃金や人員不足によって、ケアする人とケアされる人が向き合う時間そのものが奪われているという指摘も重要です。

しかし私は、賃金を上げることだけが根本的な解決策なのだろうかとも考えます。むしろ、もう一つ問わなければならないことがあります。それは、「私たちは、本当にケアを高度な専門職として育ててきたのだろうか」という問いです。

私は介護の世界にも、医学における医学原論、社会福祉学における社会福祉原論のように、十分に議論され体系化された「介護原論」が必要だと思っています。現在、介護の根源を問う議論がまったくないわけではありません。しかし、専門職教育全体を貫く「原論」として十分に確立され、共有されているとは言い難いのではないのでしょうか。

「介護とは何なのか」「人間をケアするとは何なのか」「尊厳とは何なのか」「なぜ本人を人生の主語として支えなければならないのか」

こうした根源的な問いを十分に扱わず、技術や制度だけを学んで、それを「高い専門性」と呼ぶことには限界があります。ケアの専門性とは、単なる介護技術ではありません。身体を支える技術に加えて、その人の人生を理解する力、言葉にならない意思を読み取る力、本人の意思決定を支える力、家族や地域との関係を調整する力、さらには、人間とは何者なのか、ケアは人間社会にとってどのような意味を持つのかを考える力も必要です。そして何よりも、目の前の一人の人間の尊厳に応答する力ではないのでしょうか。

そのためには、介護技術だけではなく、社会学、社会保障学、心理学、教育学、哲学、倫理学、経済学などを横断した教育が必要です。そして専門職自身が、「私は、人間の生命と尊厳を支える仕事をしている」という専門職としての「矜持」を持てる教育も必要です。

処遇改善と専門性向上は、どちらか一方ではありません。専門性を高め、その専門性を社会が正当に評価し、それにふさわしい処遇を保障する。この循環をつくらなければなりません。

私が考える「現状打開の展望」

その意味で、私はケア社会をつくるためには、大きく三つの課題があると考えています。

第一に、専門職教育の充実と「介護原論」の確立です。 現在は人手不足を背景として、効率化、省力化、人員配置などの議論が先行しがちです。しかし、単なる技術教育や効率化の議論にとどまらず、「ケアとは何か」「人間とは何か」「尊厳とは何か」を根底から問う教育体系を整え、資格取得後も学び続けられる現任教育の仕組みを充実させることです。これなくして、ケアの社会的評価を高めることは困難です。

第二に、ケアの社会的役割と専門性に対する正当な評価の確立です。 給与を含む処遇改善はその重要な一部ですが、同時に、ケアが「家庭で行われてきた世話の延長」や「誰にでもできる仕事」ではなく、他者の生命と尊厳に関わる高度な専門的営みであるという社会的認識を醸成していく必要があります。

第三に、市民一人ひとりへの生涯教育（人間形成的・教育的アプローチ）です。 私は、これが最も根幹となると考えています。制度や政策という外側からの「制度的・構造的アプローチ」だけでなく、人間観や価値観そのものを変えていく必要があります。人間は誰もが老い、病み、誰かの助けを必要として生きています。「誰にも依存しない強い個人」を目指すのではなく、人間はそもそも互いに支え、支えられる存在であることを、生涯を通して社会全体で学び直していく必要があります。

おわりに

著者が提起する「ケア労働の素晴らしい値打ち」には、私も深く共感します。しかし、その現状打開の展望については、政治体制の選択（資本主義か社会主義か）という二分法に限定して答えを求めるのではなく、より広い射程で捉え直すことが求められています。

私が必要だと考えるのは、以下の三つです。

- ① 専門職教育の充実と実効性の向上
- ② ケアの社会的役割と専門性に対する正当な評価の確立
- ③ 連帯社会を育てる市民の生涯教育

社会とは、国家や制度によって上から買われ与えられる枠組みではなく、市井の人同士の日常の関わりや助け合いという「営み」のなかから、下から自然と立ち現れてくるものです。政治思想や宗教、イデオロギーを超えて、「弱い人を誰が支えるのか」という問いからさらに一歩進み、「そもそも私たちは、互いに支え、支えられる存在なのだ」という人間観へ転換していくこと。私はそこに、資本主義か社会主義かという二分法を超えた、ケアを中心に据えた連帯社会への道があると思っています。

だからこそ私は、政治的・宗教的な立場や思想の違いによる争いを超えて、それぞれの違いを抱えたまま人と人がつながる多様な「連帯」のなかにこそ、神の思いがあるのだと信じています。なぜなら、誰もが神に愛されている存在であり、誰一人としてその尊厳を失うことはなく、神の国を受け継ぐ者だからです。

ケアとは、そのことを理念として語るだけではなく、目の前の一人を気遣い、支え、また自らも支えられるという具体的な関係のなかで実現していく営みです。誰ひとりとしてその尊厳を失うことなく、人が人を見捨てない。その小さな連帯を市井の暮らしのなかで積み重ねていくことこそが、「孤独・孤立」や「自己責任」が深刻化する現代社会を根本から乗り越えていく道であり、そこに私は「ケア社会」、そして「神の国」の萌芽を見るのです。

この文章を読みながら、私はそのように考えました。